

たんぽぽ うしん

[発行・編集] 社会福祉法人 札幌協働福祉会／アクティビティ・サポートセンター協力会
〒002-8055 札幌市北区篠路町福移147-3 TEL:011-792-3969/FAX:011-792-2887
HP <http://sapporo-kyoudoufukusikai.jp> E-mail:info-honbu@sapporo-kyoudoufukusikai.jp

東日本大震災被災者に物心両面の支援の輪を

札幌協働福祉会、石巻市で福祉ボランティア活動を開始する

札幌協働福祉会総合施設長 辰田 収

■死者・行方不明者2万8千人に

3月11日(午後2時46分)日本の記録上未曾有の大地震が起きました(マグニチュード9.0)。そして大津波が押し寄せました。今日現在で死者・行方不明者27,919名(4月19日警視庁発表)、阪神淡路大震災の6,437名を大幅に上回っています。そして東日本大震災と命名されたこの震災は福島第一原発事故の拡大もあわせて、収束の先は見えません。

■仙台市幸泉学園前施設長 小沼勝一氏も・・・

札幌協働福祉会とジェントルティーチング研修会で懇意にしていた社会福祉法人愛泉会幸泉学園前施設長小沼勝一氏が潮音荘(特養ホーム)利用者の安全な避難を見届けた後、津波にのまれ、還らぬ人となりました。

4月14日には小沼氏の葬儀があり、札幌協働福祉会からもアクティビティセンター施設長・総合施設長が行きました。札幌協働福祉会は仙台市の縁のある幸泉学園、第2共生園に支援物資を届けました。

■東日本大震災そして石巻市・世界に報道される

人口16万2千人の宮城県石巻市は、全体の死者・行方不明者の1/4を出しました。北上川河口に近い石巻市立大川小学校の災難が報道されました。108名の在校生中生存者が24名、教職員13名中生存者が1名でした。これら生々しい石巻市の惨状は、スウェーデン等、

海外の新聞で大きく報道され、札幌協働福祉会と親しいスウェーデン福祉研究者ハンソン友子さんから義捐の知らせが入っています。

■石巻市で移動支援ボランティア・Rera(レラ)開始

震災ボランティアの経験が豊かな社会福祉法人HOPが先導し、3月中旬から最大の被災地域である石巻市の民家を事務所にした震災ボランティアが始まりました。札幌協働福祉会は、宮野英隆常務理事を筆頭に、この間22名の職員を送りました。社会福祉法人HOPとともに立ち上げた支援ボランティア組織の名前は「東日本大震災移動支援ボランティアRera(レラ)」、Rera(レラ)とはアイヌ語で風の意味です。

札幌協働福祉会は10日間2名ずつの交代派遣で少なくとも半年は支援を続ける覚悟です。

拓北・あいの里の皆さん、札幌協働福祉会にかかわる関係者の皆さん、関心のある皆さん、東日本大震災被災者の方々へ物心に両面の支援をしよう。支援を行いたい方は社会福祉法人札幌協働福祉会本部へご一報をください。

▼ご連絡先

TEL 011-792-3969 FAX 011-792-2887

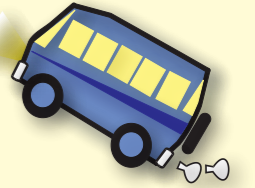
◎「移動支援ボランティア・Rera(レラ)」の活動は4面で具体的に報告します。

《今後の日程》

- 釣り旅行(天亮・焼尻) 日時:5月3日(火)~5日(木)
- さわやかパークゴルフ大会 日時:5月25日(水) 場所:東茨戸パークゴルフ場
- ジェントルティーチング研修会(一般対象) 日時:6月4日(土) 場所:拓北・あいの里地区センター
- ジェントルティーチング研修会(職員対象) 日時:6月5日(日) 場所:拓北・あいの里地区センター
- 高岡・スウェーデンヒルス祭 日時:6月11日(土) 場所:当別・高岡アクティビティセンター

2011年3月～
2011年4月

災害ボランティア派遣報告



被災地へ向けて出発!



■2011年3月25日から、災害ボランティアの経験豊かな社会福祉法人HOPとともに宮城県石巻市に札幌協働福祉会もボランティアを派遣しています。支援物資を満載した車両とともに4月23日現在、派遣した職員は22名になりました。

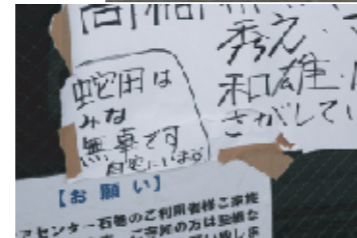
第3次の派遣員のメンバーには宮野常務理事(写真左・左から2人目)も含まれ

ています。現時点で9月までの派遣日程が組まれています。

支援物資を満載
トイレレットペーパーや
カセットコンロなどの



石巻市の様子



石巻高校の掲示板

■4月7日(金)、9日(土)の石巻市内の様子。

撮影の時点で災害発生から1ヵ月を迎えようとしていましたが、市内の至る所に津波被害の爪痕がそのまま残り、今回の災害の大きさを物語っていました。

災害支援活動の様子

■4月9日(土)、宮城県石巻市の避難所で活動しているスタッフの現地の様子です。

5日(火)に札幌から現地に向かったスタッフ(写真・右)が被災者への夕食の支援活動を行っていました。

隣の音楽教室の先生からお借りした一般住宅「東日本大震災移動支援ボランティア・Rera(レラ)」(写真・下)の事務所の様子(写真撮影:田村隆)

寒い昼食を摂る
ボランティアの皆さん



炊き出しに活躍!
スタッフの遠田さん
(写真・左の男性)



「こもれびの降る丘 遊楽館」
(石巻市の文化体育複合施設は
高齢者・障がい者中心の避難所
です。)



災害支援活動報告会



当別・高岡アクティビティー
センタースタッフの中村さん

■4月4日(月)、アクティビティーセンターで、宮城県石巻市へ3月25日から4月1日まで物資輸送、被災者の移送等、様々な支援活動を行ってきた法人スタッフの中村さんの報告会が開かれました。

集まったスタッフを前に中村さんは間近に見た被災地の様子を撮影した画像等を交え報告してくれました。



工藤さん親子



歩道橋に昇った人は助かり
車の中にいた人は流された

■4月11日(月)には、第2次派遣チームの一員で3月30日(水)から4月6日(水)まで、支援活動を行ってきた鹿原みつ子(地域支援室)さんが現地での体験を報告しました。

内容は石巻市内の避難所、市立湊小で出会った工藤さん親子の話や津波から多くの人の命を救った歩道橋の話でした。

工藤さんには派遣メンバーの市内移動、物資の調達等にご協力を頂き、活動をスムーズ行うことができました。

(写真撮影:鹿原みつ子)

移動支援ボランティア・Rera(レラ)の活動

移動支援と炊き出しのボランティアをしました

4月3日～13日派遣となり、石巻市の民家(「東日本大震災・移動支援ボランティアRera(レラ)」:音楽教室の先生から借用)に寝泊りし、活動しました。

石巻市ボランティアセンター(石巻専修大学)には、全国から約200人位のボランティアが参加しています。毎夕、ボランティアの全体ミーティングを行い、明日の活動方針を決めます。ボランティアは各役割部署に配置しており、私たちは『移送チーム』(移動支援)の活動でした。私たちのチームはリフト車(車椅子乗車可)3台と乗用車1台合計4台(社会福祉法人HOPが用意)で活動し、札幌のHOP・歩歩路・札幌協働福祉会計3

団体で6～9名を1週間～10日くらいの交替で派遣し活動を継続しています。

『移送チーム』は、避難場所から病院の送迎、移動困難な方の移動支援、入浴の介助等が主な仕事です。対象は石巻市民ですが、女川町・雄勝町・山形県など遠方への送迎も行ってます。『移送チーム』と並行して避難場所『遊楽館』で炊き出しをしました。約150人分の食事フォークをしましたが、一般の方が1割で、軽度の入院患者・精神・知的障がい者や老人ホームに入所していた方がたくさんいました。寝たきりの方もいました。

(報告:遠田朋広)

札幌からサッカーボールを届ける

—東日本大震災支援派遣・石巻に行つて—



4月13日「移動支援ボランティア・Rera(レラ)」で物資を下ろし、札幌に戻るメンバーとチェンジする。

私の任務のひとつは、先発隊の富塚さんからの依頼で、遊楽館に避難している中1の涼太君へサッカーボールを手渡すこと。この避難所はお年寄りが多く避難されているが、その中に数人の子も達がいて、皆で遊ぶものがない。サッカーボールが欲しいが、石巻にはサッカーボールがない。札幌に戻りサッカーボールを買い求め「是非彼に届けて欲しい」と私に託された。そんな想いを受け止め、無事サッカーボールを涼太君に手渡した。嬉しそうな彼の笑顔が印象的だった。

活動拠点の「Rera(レラ)」は、介助が必要な方の移動や通院や入浴介助、物資のお届けなどのサービスを提供している。我々が着いた翌日には、山形まで日帰りの火葬でご遺体・ご親族の移動支援を行うチーム、病院への通院支援チーム、寝たきりのおばあさんの入浴介助支援チームが一日の活動スケジュールに組み込まれていた。入浴介助チームが「おばあさんは踵や仙骨などに褥瘡が見られ、医療支援も必要だ」と話されていた。(翌日医師団の訪問で診察を受けられた)

湊小学校の避難所で年輩のご婦人が学校の裏のお寺を呆然と見ていた。「うちのお寺です。津波で私もあつと云う間にお寺の天井付近まで浮かび、天井からぶら

下がっているお寺の飾りにしがみついて、流れてきた住職の大きな座布団を捕まえて、やっとの思いで2階にあがりました。その後どうやってきたか分からないが、学校にたどり着きました。気が付いた時はぬれたズボンなど脱いですっぽんぽんでした。」と淡々と話された。お寺の周囲の沢山のお墓のいたる所に乗用車やワゴン車が無惨に横たわっていた。「ご住職は…」と聞くと、「八日目に遺体で見つかりました。」と話された。



「Rera(レラ)」のスタッフは、感染症にかからないよう手の消毒、食器の消毒に気をつけていた。水は持ち込んだペットボトルの水を飲み、ごはんも無洗米をペットボトルの水で炊く。外回りの消毒も毎朝、住宅の周りを噴霧器で消毒し、移動支援に使う車の中も毎朝消毒している。外に出るときは必ずマスクをつけ、体内への粉塵による感染も気をつけていた。余震の緊急避難にも気を配り、特に夜の余震にそなえ就寝前には「どの車で避難するか、運転手はかならず車のカギをもって寝る」などみんなで確認し寝袋にて就寝した。

(報告:村山雅子)